

明治初期会話教科書の研究

——市岡正一蔵版 官許『童蒙讀本會話篇』（1873）の
成り立ちを中心に——

西 本 喜久子

はじめに

明治初期会話教科書は、1873年5月に刊行された、市岡正一蔵版 官許『童蒙讀本會話篇』を嚆矢とする。明治初期近代学校教育の開始にあたり、文部省は1872年8月に「學制」を公布し、翌9月に「小學教則」（以下、「教則」）により、その実施の方法を明らかにした¹。そこに例示された教科書のなかに、「會話篇 市岡正一著 三冊」とある²。この初編が、上掲書である。文部省による刊行書ではないものの、「教則」制定時には、同書は標題も未定の刊行前の状態において、「會話」科で用いる教科書として、文部省より認定されていたのである。

本稿は、明治初期会話教科書のさきがけである、市岡正一蔵版官許『童蒙讀本會話篇』（以下、市岡本）について、まず、(1)先行研究の検討を行い、これまで市岡本についてどのように言及されてきたかをとらえたうえで、(2)明治初期に刊行された類似教科書の調査を行い、市岡本の位置を見る。さらに、(3)市岡本の原拠について考察したうえで、(4)市岡本の目的・特色・意義等を明らかにすることを目的とする。

1 先行研究の検討

明治初期に刊行された会話教科書（以下、会話篇）に関する先行研究は、多いとは言えない。そのなかから、ここでは、とくに市岡本に関する言及を中心に取り上げる。

望月久貴は、著書『明治初期国語教育の研究』（2007）³において、「『童蒙讀本會話篇』『市岡正一蔵版』（明治6年5月）・『童蒙讀本続會話篇』（明治6年8月）・『童蒙讀本會話篇二編』、『太田氏會話篇』1. 2『太田隨軒蔵版』（明治6年8月）、[掣 會話読本]『久保扶桑』（明治7年1月）、[李 會話篇]『黒田行元著』（明治7年2月）、[小学會話之捷径一名作初歩]『井出猪之助』（明治7年8月）」（pp. 353-361）の順に構成、教材内容の一部を例示のうえで、その特徴について言及した。会話篇の標題に替えて編纂者名を挙げると、市岡本、太田本、久保本、黒田本、井出本の5種が取り上げられた。市岡本に関しては、「文法体系」

「談話表現」が「未熟」であるがゆえの「不自然さ」を時代の限界とするものの、「文法的な視点から日常会話の諸文型を適当に配列し」たこと、に評価が示された (p. 355)。同書以外は、「日常会話用語」を「配列」するも、「生硬な訳語という感じが強い」(太田本)、「文語体の会話文例」・「生硬な談話体」の「訳文」である(黒田本)、などとして、市岡本のような評価は示されていない。

また、秋田喜三郎は、著書『初等教育 國語教科書發達史』(1977)⁴において、久保本と太田本を取り上げた。久保本は太田本に「比し優れてゐ」としながらも、「當時に於ける教材選擇」には問題のあることが示唆された。市岡本については、黒田本とともに標題のみを掲げて、「何れも直譯體のもので太田氏の「會話篇」類似のものである」(p. 74)と言う。ここでは、市岡本には、太田本「類似」の「直譯體」のものであるという評価が示されている。

さらに、古田東朔は、編書『小學讀本便覽』第3巻(1981)⁵「解説」において、上掲の5種に、楢爪貫一輯録『日本會話篇』(以下、楢爪本)を加えた6種の會話篇について「會話の文体は全く多種多様である」としながらも、いくつかの「例文」を掲げ、文末辞の特徴を5類型に「概略」した。ここで、市岡本は「3 マス調とデゴザイマス調の共用(それに常体、デアリマス調、デアル調が混用)」と示された⁶。同時期の「教科書の話しことばは文体を模索していたのである」と言う⁷。さらに、市岡本の第27章、楢爪本の第1章・17章・18章・19章の章名を掲げて、これらは「ガラタマ『英蘭會話篇訳語』に基づいて著わされたと判断される」(p. 342)と示唆した。

このように、先行研究においては、いくつかの教科書の教材文の一部を取り上げて、その文体の特徴などについて言及されてきた。が、會話篇の全体像ははまだ明らかにされていない。個別の會話篇についても同様である。市岡本に関しても部分的に言及されているけれども、會話篇の嚆矢としての考察が行われているとは言えない。さらに、原拠の示唆についてもその根拠は十分とは言えない。原拠を特定したうえで、編纂において、どのように教材化が試みられたかに関する検証も残されている。

2 明治初期に刊行された類似教科書の調査

そこで、先行研究に掲げられた會話篇を含めて、明治初期に刊行された會話篇とその原拠の調査を実施した。まず、會話篇の全体像をとらえるべく、調査にとりかかった。

調査を行った図書館名を略記により示すと、NDL(国立国会図書館)、TB(東書文庫)、KCL(駒ヶ根市立図書館)、WUL(早稲田大学図書館)、TUL(筑波大学附属図書館)、ONL(大阪府立中之島図書館)、SPL(佐賀県立図書館)等。

先行研究において言及された会話篇7種⁸に、今回の調査により所在の判明したものを加えると、現時点において、明治初期に刊行された会話篇は、11種を数えることができる。それを刊行年の順に暫定的に(1)~(11)として、つぎに、表1「明治初期に刊行された会話教科書一覧表」として掲げる。その掲載順については、同一刊行年書においては、主として刊行月の刻字の順に、また、刊行年のみの書は同一年次のおわりに掲げた。刊行月の同じ

表1 明治初期に刊行された会話教科書一覧表

編纂者名	会話教科書名(丁数)	出版所名・書林名	刊行年月	所蔵
(1) 市岡正一 蔵版	官許『童蒙讀本會話篇』 ①官許『童蒙讀本會話篇』(33丁)	海軍兵學寮御用出版所 書林 青山清吾	1873.5	家蔵/NDL /KCL
	②『童蒙讀本會話篇』二篇(25丁)	東京書林 腐金屋清吉發兌	1873/4	NDL/KCL
	③官許『童蒙讀本續會話篇』(24丁)	他、發行書林:三都、32名	1873.8	NDL/KCL
(2) 太田隨軒 蔵版	『太田氏會話篇』 ①卷一(39丁) ②卷二(40丁)	東京書林 萬笈閣發兌 椀屋喜兵衛發兌	1873.8	NDL/KCL NDL/KCL
(3) 大川堂主人 編	『童蒙會話篇』(36丁)	東京書肆 誠至堂發兌	1873.11	NDL
(4) 久保扶桑撰	『初學會話讀本』全二冊 ①第一輯(27丁) ②卷之二(36丁、見返し・奥付無)	〈官許〉甘泉堂發兌 東京書林 山中市兵衛發兌	1874.1	TB TB/TUL
(5) 上羽勝衛纂	『小學會話篇』全二冊 ①卷之一(28丁) ②卷之二(28丁、題簽・見返し無)	大觀堂蔵版 官許 東京:岡田屋嘉七 書林:肥後、豊前屋太平 他4名	1874.2	NDL/KCL NDL/KCL
(6) 黒田行元著	『小學會話篇』(42丁)	〈官許 明治7年2月刻成〉 京都書林:正宝堂他發兌	1874.2	TB
(7) 井出猪之助 輯	『小學會話之捷徑』 ①卷上(23丁) ②卷下(24丁、見返し・奥付無) ③附録(27丁)	大坂書肆:文敬堂梓	1874.6	ONL
(8) 中村最文著	『日本會話』卷一(29丁)	發兌書林:鳥兼平七 他11名 (書林名無)	1874.7	NDL
(9) 橋爪貫一 輯録	『日本會話篇』 ①卷之一(30丁) ②卷之二(31丁)	東京玉山堂發兌 發行書林:玉山堂稲田佐兵衛 三都書林:他8名	1874	NDL NDL
(10) 田中岩太郎 著	『童蒙會話篇』(22丁)	備中笠岡 森田文藏梓 弘通書肆:東京、大坂等15名	1875.1	NDL
(11) 西野古海著	『皇朝會話篇』全(30丁)	二書堂	1875.2	NDL

※(1)~(2)の刊行年は、NDL では1873年と示されるが、見返し・奥付はない。KCL 蔵本の見返しには1874年と刻字されている。

ものは、巻数の多い順とした。刊行年月は見返しの刻字による。標題については、見返しの中央の刻字を用いた。見返しの無いものについては、第1丁の刻字による。編纂者名、出版所（發兌、發行）・書林名も、同様に見返しを第一とし、編纂者名の標記については、その名の下に刻字された「蔵版」「撰」等も併せて掲げた。出版所については、見返しの刻字を該当欄の1行目に掲げた。その刻字の無いものについては、同欄の1行目を空けた。「出版所名・書林名」欄に記した〈官許〉は、見返し枠外上に刻字されたもの。〈〉を付していないものは奥付の刻字による。刊行年は、西暦で示す。奥付に書林名など複数刻字されている場合には、はじめのものを掲げ、その後は掲載数のみを記した。調査を行った図書館名は、上掲の略記を用いて、「所蔵」の欄の該当の会話篇標題と同一行に掲げた。なお、(7)井出本の出版所名と①③の丁数は、前掲書（望月、2007、p. 361）による。

この調査結果を、つぎのようにまとめておく。なお、この調査は今後も継続したい。

- ①会話篇は、1873年5月～1875年2月までのおよそ2年間に11種計19巻が刊行された。
- ②「官許」の刻字については、見返し枠内の右上方に見ることができるのは、市岡本のみであるが、見返しの枠外上に刻字された(4)(6)、奥付に刻字された(5)を含めると、市岡本につづく、官許本は、(4)久保本、(5)上羽本、(6)黒田本の4種となる。このように見るならば、(2)(3)を除くと、市岡本に続いて翌2月まで官許による刊行が続いたことになる。文部省では、市岡本をはじめとする会話篇の刊行を必要としていたようである。
- ③とくに、市岡本は家蔵書によると、裏表紙前の見開きの2丁に、「發行書林」として、京都三條通 出雲寺文治郎、大坂心齋橋通 伊丹屋善兵衛をはじめ、東京日本橋通 須原屋根茂兵衛等32名が掲げられている。後継書と比べると、市岡本の刊行と取り次ぎがひときわ多い。さらに家蔵書3冊中2冊には、「桃山学校生徒」という墨書、「菊田小學」の朱色の印影が認められる。「會話」科は、文部省をはじめ地方の「教則」に教科として掲げられたのみならず、会話篇による授業が実施されていたことの証左である。
- ④また、上掲表の会話篇には、その語彙は同一ではないものの、教材文とその話題に関して、類似性の認められるものがある。(2)太田本と類似性の認められるものは、(6)であるのに対して、(1)市岡本と類似性の認められるものは、(3)(5)(9)(11)。これらは、(1)と同一の原拠によるものと考えられる。会話篇のさきがけとしての市岡本の編纂のありようが、後継書の編纂に影響を及ぼしたことが考えられる。詳細は、稿を改めて検証する。

3 市岡本の原拠

(1) 調査

つづいて、前掲の古田により示唆された、市岡本原拠である「ガラタマ『英蘭会話篇訳

語』は、「明治元初秋」渡部氏蔵版『ガラタマ先生口授 英蘭會話譯語』（1868、以下、『譯語』）であることをNDL、WUL、TB等において確認した。その後、『譯語』が市岡本の原拠であることの検証を行った。検証作業は、つぎの2段階によった。①市岡本教材文と『譯語』の會話文を比較対照し、語彙と話題に関して同一性・類似性の認められる會話文をそれぞれ数え、②『譯語』を原拠とする教材文の市岡本に占める割合を求めた。

まず、それぞれの教材文・會話文の総数を数えると、市岡本教材文の総数は531文、『譯語』會話文の総数1237文であった。両者の比較対照の結果、『譯語』の會話文のなかに「不レ可レ譯此詞ノ意味我國ニナシ」（15章1）をはじめ、「不レ可レ譯」（17章2、29章後編33）とするものが計3文あり、市岡本には『譯語』の會話文2文を参考に1文とした、重複と数えられる教材文が3文がある。これを合わせた6文を『譯語』會話文の総数から除くと、『譯語』の修正総文数は1231文となる。一方、市岡本教材文の362文に、『譯語』會話文と同一性・類似性が認められた。すると、市岡本教材文の総数に占める『譯語』由来の教材文の割合は、小数点以下第4位を四捨五入すると、およそ68.2パーセントとなる。また、『譯語』の會話文総数のなかで、市岡本教材文の参考にされた割合は、およそ、29.4パーセントであることも明らかとなった。つまり、『譯語』のおよそ3割が市岡本の教材文の参考にされ、市岡本の教材文全体における『譯語』由来の教材文はおよそ7割を占めることになる。これにより、市岡本の原拠は、『譯語』であるということができよう。

(2) 『譯語』の原書：『英吉利會話』

この『譯語』の「^{ママ}會話篇譯語序」には、「戊辰初秋 無盡藏主人誌」として、渡部による『譯語』の原書への言及と同書刷行にいたる経緯が示されている。そこに掲げられた「蘭人ファンデルペールの著せる英吉利會話篇」を手がかりにNDL、WUL、SPL等における調査を行い、この『譯語』の原書が、江戸渡部氏刷行 R.VAN DER PYL、CONVERSATION OF ENGLISH LANGUAGE ; FOR THOSE, WHO BEGIN TO LEARN THE ENGLISH、『ENGLISH CONVERSATION ガラタマ先生 英吉利會話』（以下、『英吉利會話』）であることも判明した⁹。

ここで、刷行の時代背景と評価について見ておこう。幕末の長崎では新しい時代の幕開けを目前に、通詞においても外国語會話習得は英語への転換が図られた。そのため、「ファン・デル・ペイル英語書」などの俗称で知られる「蘭語による英学書が復刻」された。「復刻版はもとより原本も」「幕末の日本英語学習には強い影響を与えている」と言う¹⁰。同書の一部、「會話篇」が復刻刊行されたものが、『英吉利會話』（1867）である。

(3) 『譯語』の「蔵梓」（『英吉利會話』の「刷行」）者 渡辺一郎（温）

さて、『譯語』の「蔵梓」者「渡部氏」こと、渡部一郎（1837-1898、1872年2月壬申戸

籍施行より温)は、戸塚武比古(1983)¹¹によると、「幕府御用人の」「渡部重三郎」「の一子として」「江戸に生まれ」¹²、「幕末開国の波の中で英学を身につけて開成所の教授職並として奉職した際に、同所で教科書の一書として上掲書を「刷行」したと言う¹³。『譯語』見返しの標題に掲げられた「ガラタマ先生」とは、幕末に長崎に來日したオランダ人化学者であり陸軍軍医でもあった、ハラタマ(Gratama, Koenraad Wolter, 1831-1888)のこと¹⁴。その後、開成所に迎えられた。両氏の接点はここに見いだすことができる。「川本内田」の「譯出」に「補削校定」を施して『譯語』を刊行した渡部は、幕末には、わが国の最高学府の「英学教授職並」にふさわしい、学識経験者であった¹⁵。したがって、『譯語』に掲げられた日本語会話文は当時としては、かなり高い水準であったと言えよう。

(4) 『譯語』の構成

基本的に『譯語』は、その原書『英吉利會話』の章の構成と教材文の順にしたがい、全て片仮名により、訳出されている。『英吉利會話』の一部(29章)に重刻があるが、それは『譯語』において整合させているため、ともに、全38章構成とみなすことができる。それぞれの章は1章から14章までは、19~24の會話文が掲げられ、16章の31教材文のつぎは、17章の60教材文のように、次第に各章には多くの會話文がおさめられるようになる。各章の教材文には、文頭に、「1」から一つずつ算用数字が付されている。これはそのまま、市岡本にも受け継がれている。各章は、たとえば、4章は、手紙を書くという話題のもとに編纂されるなど、ほぼ、ひとつの話題に関する會話文が掲げられ會話が展開している。

(5) 『譯語』の目的

『會話篇譯語序』においては、同書刷行目的は、「貿易市場彼我日用の便に備ふ」ために原書を訳出することを明示している。つづく、「○附言」では、訳出語をめぐり、「余は寧大人君子の誹を甘んじて都て江戸の方言を以て記し」たことを示した。

さて、ここで注目したいことは、「會話は固より其國日用の通語なり」と會話の定義が掲げられたこと。さらに、当時のわが国の話し言葉の実態は「國中に各地の方言訛音ありて邦人すら譯を用ひされば互に解せざることのあるに至れり」ということは、「實に憂ふべき事なり」と示す。渡部は、明治新教育における「會話」科の創設目的ならびにその根柢と同様の見識を1868年の時点で、このように示していたのである。洋学者、渡部の優れた先見性がうかがえる。

4 市岡本の考察

(1) 著者 市岡正一

下中弘によると、市岡は「旧幕臣の出身であったとみられる」¹⁶。その刊行書のなかで、

最も早いものが、市岡本（1873）と『兒學綴字教本』。翌年以降刊行された教科書には地理書、地学書などがあり、翌々年には『小學入門教授方法』¹⁷等も認められる。市岡は、明治初期学校教育に関する、深い見識と学識を有していたようである。と同時に、「旧幕臣」出身の学識者としての高い素養に基づいた言語により、教材文を整えたことになる。

(2) 市岡本の目的

市岡本の見返しのつぎに掲げられた、「童蒙讀本會話篇例言 ○はなしのかなめ」では、おもに、「はなし」で用いる①人称代名詞の用法、②接尾辞に関する用法を説明し、次に③人称代名詞の語彙の整理と読みかた（話しかた）に関してつぎのように示した。

○はなしの うちかなめ とする ことば ハ 三つあり○一にははなす ひとが わが のかわりに もち ゆる わたくしまた ハ われと いうことば○二には はなしを しかける あひてのなのかわりに つかふ あなた また ハ おまへの ごとき ことば ○三には はなしの うちにつかふ よのひと またハ もののなのかわりに もちゆる あれ あのと あのおんな それ これの ごとき ことば なり これを なにかわる ことば と いふなり

○いま まへに あらわせしハ ひとり またハ ひとつにつかふ ことば にて を、くにもち ゆる とき ハ その した ^ら ^{ども} 共 という ことば を くわへべし たとへハ わたくしども おまへら、あのとら、あのおんなら、それら、これら、の ごとき ハみな おほくにつかふ なり

○また わたくし われ おれ なれ あなた をまへ なんじ てまへ あのかた あのおかた あのと あのおとこ あのおんな あれ などと いふ いろいろの ことば あれども このほんにハ たゞ 私 ^{わたくし} ^{をまへ} ^{あれ} ^{あのと} ^{あのおんな} 汝 彼人 彼男 彼女のミ もち ゆる ゆへたつとき いやしきハ わけ つかふ べし また ^{さま} ^{どの} 様 殿 さん などの ところ ハ ミな ^{きみ} 君と あらわしたり (1丁オ-2丁ウ)

たとえば、二人称代名詞については、「なれ」「あなた」「をまへ」「なんじ」「てまへ」という言葉を同書では「汝」（をまへ）のみを用いた、としたように、共通に用いる言葉を一つにまとめたと言う。このように同書の目的は、読むことをとおして会話文に提示された語彙と例文を、学習者が共通理解し、「日用」の言葉として運用する能力の育成が目指されたと考えられる。

これらは、市岡本の学習をとおして、明治初期話し言葉教育濫觴期に取り組みされた新たな試みの一つであると言うことができよう。明治初期のわが国が緊要の課題とした、「通語」の基礎力の習得を目的とした、話し言葉教育に関する真摯な取り組みの試みとして、ある意味においては、市岡本におけるひとつの提案とも言うことができる。

(3) 市岡本の構成における特色

まず、市岡本の構成を見てみよう。見返しに続き、「童蒙読本會話篇例言」として、編纂上の新たな試みと留意点が2丁にわたり掲げられ、つづいて、第1章6教材文から第41章20教材文にいたるまで（1丁オ-33丁オ）、教材文が配列されている。このように、全41章構成、各章では6~20の教材文が示された。教材文数は後の章になるほど増える。第1~5章までは6教材文、第6章から9章までは7教材文、以降章内の教材文は次第に数を増し、第18章から37章までは、14~17の教材文が刻字されている。前述のように、総計531文が示された。また、各丁は1行1文で章名を含めて9行の教材文から構成されている。

では、つぎに、市岡本の教材編纂において、その原拠である『譯語』の会話文をどのように教材化したか、その構成を見てみよう。ここで、教材構成対照表を作成し、その一部を、つぎに、表2として掲げる。市岡本の章立の旧漢字は算用数字に改めた。市岡本で教

表2 市岡本と『譯語』の教材構成対照表

市 岡 本		『 譯 語 』	
第 1 章		第 1 章	
1 私ノ家		1 コンニチハ	
2 汝ノ机		2 コンパンハ	
3 彼人ノ牛		3 オヤスミナサイ	
4 彼女ノ扇		4 オハヤウ	
5 此 馬		5 クダサイ	
6 其 箱		6 オカシナサイ	
第 2 章		第 2 章	
1 私ガ讀ム		7 アノヒトラ、オツレナサイ	
2 汝ハ勸める		8 ワタクシドモヲ、オヤリナサイ	
3 彼ハ孝ブ		10 タダイマ	
4 子供ハ習フ		11 ワタクシニ、オイイツケナサイ	
5 鳥ハ飛ブ		12 ワタクシドモヲ、ツレニ、オイデナサイ	
6 犬ハ走ル		13 ワタクシニハ、デキマセヌ	
		14 アナタニハ、シエナイ	
第 3 章		第 2 章	
1 本ヲ讀ミナ		15 アノヒトハ、シナカロウ	
2 字ヲ書ナ		16 アノヒトタチハ、ソレヲ、シタラ、ヨカロウ	
3 彼人ヲ呼ナ		17 ガマンナサイ	
4 夫ヲ上ナ		18 オダマリナサイ	
5 是ヲ摺ナ		19 ハナシヲ、ナサルナ	
6 墨ヲ摺ナ		20 アノヒトハ、ハナサヌダロウ	
		21 アノヒトタチハ、ハナセマス	
第 4 章		第 2 章	
1 私ニ下サイ (被下)	1-5	1 ソレハ、ホントウデス	
2 私ニ御貸ナサイ (被成)	1-6	2 ソレハホントウデ、ゴザイマスカ	
3 彼ノ人ノ所へ持テ御出ナサイ (或ハ持テ行ケ)		3 ソレハ、ホントウデナイ	
4 私共ニ御申付ナサイ	1-11	4 ナルホド、ジツニ	
5 私ニ仰セラレヨ (或ハ言エ)	1-11	5 ソレハ、ホントウデ、ゴザイマシタカ	
6 私ハ出来マセヌ	1-13	6 ワタクシハ、ソウ、オモヒマス	

材化された原拠会話文は、それぞれ太字で示した。表2の市岡本の右側枠内の数字は、『譯語』の会話文に依拠した章（左）と教材文番号（右）を示す。

この表2は、前述のように、市岡本と『譯語』の教材構成対照表のはじめの部分であるが、『譯語』との全体比較をとおして市岡本の構成には、つぎの特色が認められる。

- ①章立てに関しては、独立した独自教材文による部（第1章～第3章まで）と『譯語』由来の教材文（第4章～第41章）による2部構成になっている。
- ②第1章～第3章までの構成を久保田本に掲げられている文法の「九品」の「語法」（3丁オー7丁オ）にしたがうと、第1章は、代名詞+助詞（係詞）+實名詞（普通名詞）[2語～4語]、第2章は、代名詞+助詞（係詞）+動詞（有對）[4語～5語]、第3章は実名詞（普通名詞）・代名詞+助詞（係詞）+動詞（有對）[4語～5語]、のように分類できる。このような「語法」を語数の少ない文字の教材をとおして、学ばせようとした可能性も考えられる。また、第4章第1文（以下、4-1のように記す）に掲げた教材文が、「私ニ下サイ」であることから、その前章に、「江戸の方言」を用いた第3章でより文字数の少ない指示・命令・依頼文に掲げた可能性も考えられる。
- ③第4章以降は、基本的には『譯語』から、ほぼ教材文の掲載順にしたがい意図的に教材文を精選して掲げられ、章が構成された。
- ④たとえば、第9章（7文構成）は『譯語』4-1：「ワタクシハ、テガミヲ、カク」をはじめ、適宜に精選して配列されている。が、第1文を9-2：「私ハ手紙ヲ書テ居リマス」と丁寧な表現にして、その前9-1に「何ヲ汝ハ書テ居ナサルカ」を加筆挿入することにより、同章は第1文の問いかけに対する答え（反応）が3文つづく。このように『譯語』の教材文に加筆修正を施して、章の構成が問いかけと答えとなるよう修正された。
- ⑤それぞれの章の構成については、『譯語』同様に、ひとつの話題のもとに教材文を構成するように工夫されている。『譯語』教材が生活環境から離れている場合には、いくつかの『譯語』由来の教材文の後に、テーマにしたがっていくつかの教材文を独自に創作、加筆を行い教材文数が整うように編纂した箇所が認められる（第23章等）。
- ⑥食事会の場面など、生活経験から遠い章については、食材や調味料などを日本のものに替えて、一章全部を創作した章もある（第25章、15章という刻字は誤刻）。
- ⑦各章は、第1章の6文から第41章の20文というように、易→難、短→長というように教材文を配列するなど、学習の順次性が考慮されている。
- ⑧1丁構成が、9行という配列は市岡本をとおして一貫している。そのため、読みやすい大きさの文字、読みやすい楷書体による漢字・片仮名混淆文に、初等教育入門期（「會

話讀方」：第7級～第6級）の学習者に対する配慮が認められる。

(4) 市岡本の意義

以上、『譯語』を原拠として、市岡本がどのように編纂されたかに着目しつつ、目的と構成の特色について明らかにした。ここで、明治初期会話篇の嚆矢である、市岡本の意義を、つぎのようにまとめておく。

(1)『譯語』における「會話」の定義、「日用の通語」を第一とするという基本的言語観をふまえて教科書を編纂した。

・市岡本の編纂において、日本語会話で編纂された『譯語』を原拠としたことをとおして、「會話は固より其國日用の通語なり」という「會話」の定義を認識し、わが「國中に各地の方言訛音ありて邦人すら譯を用ひされ相互に解せざることのある」言語状況を解消することが明治初期会話学習の目的であることを示した。

(2)日用の通語の普及を意識した試み

・「日用の通語」の学習として、さまざまに用いられてきた、人称代名詞、代名詞、連体詞、接尾辞などをいくつかにまとめることを教材文において、提案した。

・できる限り平易な日用語による会話教材文の採用を試みた。江戸の方言を用いた話し言葉に近い教材文を提示することにより、地方の学習者の興味関心を惹きつけるきっかけを示した。

・わが国の学習者の生活の実態に応じて、『譯語』の内容・語彙の修正が行われた。

(3)教科書の構成に関する工夫を試みた。

・まず、「○はなしのかなめ」として、編纂の重要な要点を掲げ、学びにおける留意点が周知されるように、読み手（教師、あるいは子ども）の注意の喚起を促したこと、そのつぎに教材本文が展開する、というひとつの教科書の構成を示した。

・教材は章ごとに示され、教材文の長さは短いものから次第に長い文となる。章の構成も次第に教材数が増すように、指導上の配慮と工夫が行われた。

・各章の教材文の配列と構成については、ひとつの話題で展開するよう、工夫を試みた。

(4)教材化において、学習者への配慮を示した。

・『譯語』における片仮名による会話文を修正して、漢字片仮名混淆文教材を提案した。読み易さ、ならびに漢字に慣れ親しむことのできる教科書を提案した。

・各章の教材数を少なく、文字を大きくした（1丁9文（行）に）ことにより、学習者の年齢に対する配慮を示した。

おわりに

市岡本は、明治初期会話教科書の嚆矢として、その編纂に際して、『譯語』（1868）を原拠としたことが、なによりも大きな意味をもつ。渡部が『譯語』の「附言」に示した「會話」の定義、当時のわが国の「日用の通語」における「國中」の「各地の方言訛音」の問題、「會話」の学びの目的等は、まさに、「會話」科創設の目的と重なる見識である。実に興味深い。つづいて、市岡本については、続篇とあわせて内容の特色を明らかにしたい。さらに、市岡本の教科書編纂における試みが、後継書にどのように受け継がれたか、についても探究したい。

注

- 1 文部省内教育史編纂会 代表者關屋龍吉『教育制度發達史』第1巻、教育資料調査会、1938.5、1965.2、p.397。文部省『學制五十年史』、1923.10、p.42、参照。
- 2 注1に同じ、p.416。
- 3 望月久貴『明治初期國語教育の研究』、溪水社、2007.2。同書は、学位論文（1984）に補筆が施されたものを、野地潤家氏の御尽力により、浜本純逸・宏子氏の校正を経て刊行された。
- 4 秋田喜三郎『初等教育 國語教科書發達史』、文化評論出版、1977.10、p.74。
- 5 古田東朔編『小學讀本便覽』第3巻「解説」、武蔵野書院、1981.6、p.340。府川源一郎解説・校訂、古田東朔『古田東朔 近現代 日本語生成コレクション』第5巻國語科教育—誕生と發展（くろしお出版、2013.6）には、同上書における「解説」の前書論文（1971）所収。会話教科書に関する言及は、同上書の「解説」が詳しい。
- 6 注5に同じ。p.342。
- 7 注5に同じ。p.343。
- 8 本稿ではふれていないが、大橋敦夫「明治初期國語教科書の位置—『童蒙綴字篇』『童蒙會話篇』の日本語分析—」（1991）で取り上げられた、田中岩太郎『童蒙會話篇』初編（1875）をくわえると、先行研究における會話篇は7種となる。
- 9 ENGLISH CONVERSATION. ガラタマ先生閱『英吉利會話』、江戸渡部氏刷行、R.VAN DERPRL., CONVERSATION OF ENGLISH LANGUAGE; FOR THOSE, WHO BEGIN TO LEARN THE ENGLISH. THIRD EDITION. NUMADZ, WATANABE & CO. FOURTH YEAR OF MEIJI, 50p. TB、WUL、SPL 蔵書は1871年沼津刊第3版。見返し左の「江戸渡部氏刷行」より、これが、渡部が江戸の開成所教授職並として出仕の際に刊行された版の、第

3版であることを示す。

10杉本つとむ『日本英語文化史の研究』、『杉本つとむ著作選集』8、八坂書房、1999.5、pp. 201-202。ここに、原本は1838年、オランダ、ドルドレヒトで刊行された「Van der Pijl: Gemeenzame Leerwijs, voor Degenen, die de Engelsche taal begibben teleeren./Nagedrukt te Nagasaki, in het 4de Jaar van Ansei」と示されている。

11戸塚武比古論文「渡部温略伝—初期—英学者の歩んだ道」（『英学史研究』第16号、日本英学史学会、1983、pp. 33-50）参照。

12注11に同じ。p. 33。

13注11に同じ。p. 40。

14小泉欽司編『朝日日本歴史人物事典』、朝日新聞出版社、1994、p. 1355

15片桐芳雄「幕末明治の洋学者・渡辺温（一郎）覚書(1)」、愛知教育大学研究報告32（教育科学編）、pp. 33-47、1983.1、pp. 62-64。この論文には、同標題による(2)1984.1、pp. 61-79、(3)1985.2、pp. 33-47があり、明治期の刊行書についても言及されている。

16市岡正一『徳川盛世録』（第壺編卷之壺・卷之貳、博聞社、1889）を底本として、平凡社より刊行（1989.1）された、東洋文庫496『徳川盛世録 市岡正一』における下中弘による「解説」（pp. 310-319）に基づく。

17本書は、見返しに「市岡正一編輯」「弘學館蔵版」とあり、奥付の刊行年には、「明治八年六月三日官許」と刻字されている。『兒學綴字教本』（1873）も奥付に「官許」とあるが、見返しの編纂者名には「市岡正一著」と刻字されている。いずれもNDL蔵。

付記：本稿は、第125回全国大学国語教育学会広島大会（2013.10.26）における自由研究発表に基づくものである。発表に際していただいた、ご質問、ご助言に感謝いたします。

（広島大学大学院修士課程修了生）